平成 19 年 1 月 21 日作成
（第 29 号）

ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く
西南へて至る　酒折の宮に　（2）

吉　田　六　雄

西南へて至る　（読者のご質問に答えて）

前号の「検証ホツマツタヱ 28 号」にて、「筑波(山)に登り　君臣も　西南へて至る　酒折の　宮に日暮れて」の文節より、筑波山より西南方向に行くと、酒折の宮に到達するか否かを検証してきた。だがその検証結果について「読者」より 2 つの質問を頂いた。

一つ目は、「西南方向で発見された神奈川県の愛甲郡愛川町八管山の八管神社また神奈川県相模原市淵野辺本町の皇武神社から、あとのヤマトタケルの道順について」であった。前回の道順の説明は、筑波山→(途中調査中)→相模原市→愛甲郡→大磯・中郡→御殿場市→富士吉田市→酒折の宮へ至る道順であった。だが質問者の調査では、愛甲郡愛川町の「八管神社」を下山し、そのあと「富士吉田市→酒折の宮」方向に行くには、大磯を通過しなくても、もっと近道があるとのことであつた。それは愛川町→道志川沿いを登る→山中湖→富士吉田市のルートだそうである。

そうすると現在では約 2 時間程度のドライブで、愛川町→山中湖に着くとのことである。そのことで私も「八管神社」を下山して、「大磯に行くか」または「山中湖にいくか」立ち止まって考えてみた。そうすると読者が教えてくれた「山中湖の方角」に丹沢山系があり、山の向こうに「山中湖」がある様に感じられた。東征を終えて「酒折宮」に報告に行くヤマトタケは、恐らく近道の「道志川沿い」を選択したとも容易に想像がつくようだ。

酒折宮の所在地（読者のご質問に答えて）

読者のご質問の二つ目は、「酒折宮の所在地」についてである。「酒折宮の所在地が、未だ定まってないとのことであるが、他の研究者の意見があれば紹介してほしい。」とのことであった。そこでホツマ研究者の諸先輩たちが過去に述べた中から資料を引用し、「酒折宮の所在地の研究結果」をご紹介することにした。資料紹介にあたっては研究者の立場は違えどホツマツタヱで云う「公」であり、立場が違うことを検証することが、「検証ホツマツタヱ」の神髄と信ずる。

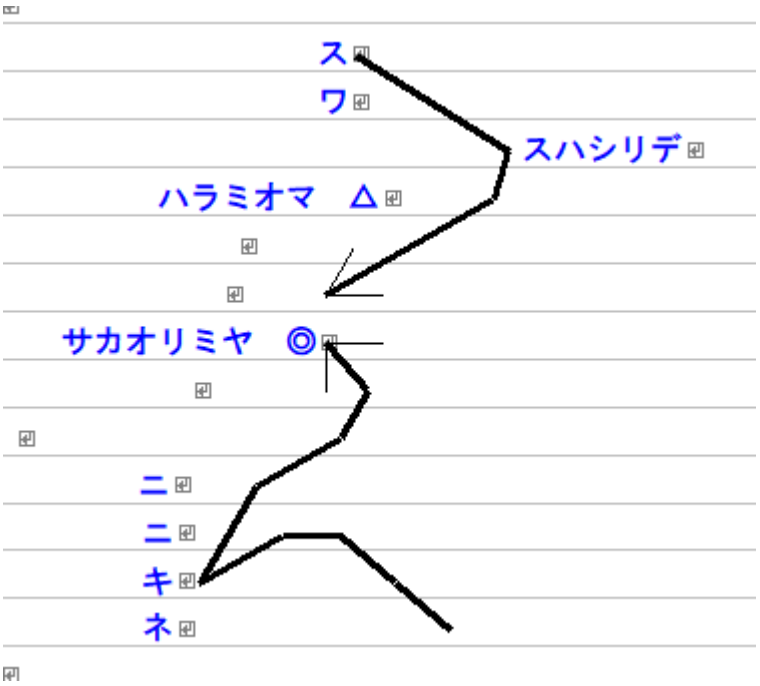
富士山・南麓にあった酒折宮(考察)

最初はヲシデ研究家と自称される「I さん」の意見を取り上げたい。その意見は平成１２年７月１１日付でお便りを戴いていたもので、特に酒折宮に関する部分を抜粋して見ました。
「さて今般(の酒折宮)でのことで、重要な焦点とすべきは、24-69～70 文の

24-69 文
オキツハマ　キミヨロコビテ
コシナラヘ　ユクオオミヤハ
ヤマスミノ　ミチムカエシテ
ミトコロニ　スワガミアエハ

24-70 文
スハシリデ　サカオリミヤニ
イリイマス

とあることから、ここの解釈についての(貴殿と小生との意見に)差があります。松本先生も次の解釈のように「スワガ　スハシリでして　サカオリミヤにとは、



の(図の)ごとくに　ミトコロ　すなわち、昔のトシタミヤ・ハラミノミヤの故地のサカオリミヤに、来たということだと思います。ミトコロとは、むりやり漢字にあてるならば「御所」とでもなるかと思います。」

敬具

平成十二年七月十一日
　吉田六雄様　　Ｉさん

　そこで、Ｉさんの文章を直訳文して、また前述の図と重ね合わせて説明を補足すると、

24-69 文
興津浜　　君喜びて
腰並へ　　行く大宮は
ヤマスミの　道迎えして
御所に　　スワ(氏)が御会えは

24-70 文
素走りで　　酒折宮に
入り居ます

説明文
　静岡市の旧清水市・興津の浜に到着されたニニキネの天君は、腰の列の出迎えに大いに喜ばれ、家臣の一団と共に酒折宮(大宮)に向かわれた。御所ではヤマスミの出迎えを受けられたことで、天君はさらに大いに喜ばれた。またスワ(氏)はニニキネの天君を迎え様と、長野の諏訪からハラミヤマ(富士山)の周囲を巡り、素走り(急ぎ足)されてミトコロ(御所)すなわち、昔のトシタミヤ・ハラミノミヤの故地の酒折宮に入られた。説明の要点を見ますとニニキネの天君とスワ(氏)は、別々の方向からハラミヤマの南麓の酒折宮に入ったと解釈している。

大明見にあった酒折宮(考察)

次ぎに取り上げる意見は、ホツマツタヱ研究の第一人者である松本喜之助先生の意見である。先生は研究の発表の場として、「月刊ほつま」を定期的に発行されていた。その「月刊ほつま」を私どもの「検証ホツマツタヱ」の発行人である宮永さんより長年借用しているが、その「月刊ほつま」76・77号(昭和55年6月1日発行)の2～3頁に、酒折宮の所在地が調査されていた。

「それはフトニノ天君が富士山への大旅行をされた下りから始めなければならない。」

三月中　　ハラミ山へと
み幸なる　　その道なりて
クロダより　　カグ山カモや
タガノ宮　　スワサカオリの
タケヒテル　　御饗して待つ
　　(三二アヤ10頁)

クロダとは、奈良県磯城郡田原本町黒田のことで、当時の都だったが、ここを発ったフトニノ天君は、まづ近くのカグ山(桜井市香具山)にみ幸された。ここはカンヤマトイハレヒコノ天君(神武天皇)が戦勝祈願された聖蹟だが、後代、耳成山、畝傍山と共に大和三山として有名なことは云ふまでもない。このカグ山から京都へと道をとり、カモ(上下賀茂神社)へ参拝し、次いでタガノ宮(滋賀県犬上郡多賀町多賀大社)へあがり、それから美濃、飛騨より信濃に入られたであらう。この道は後に所謂東山道である。ここを東にとって「スワサカオリ」の宮につき、ここでタケヒテルの心こもる接待をうけられたといふのである。

ここでの「スワサカオリ」といふ記述は、勿論「スワにサカオリの宮がある」といふことではないだろう。これはホツマの他の叙述でも実例の多い文章の省略に従ったのと同じに理解した方がいい。ではサカオリの宮とは、一体どこなのか。それは右に続く次の文句によって、その地点をうかがうことができる。

山登り　　下るスバシリ
裾めぐ　　ムメ大宮に
入り居ます　　(三二アヤ10頁)

といふことは、サカオリの宮を出立した天君は、富士山に登り、スバシリに下りられたといふことであろう。このスバシリが今の静岡県駿東郡須走なら、天君は富士吉田市の吉田口登山道から富士山へお上りになったとしていいだろう。そして富士山の東側の須走に下られたとふことになる。

そして今の御殿場市から広い富士裾野を裾野市、富士市と経てムメ大宮に入られたのであろう。ムメ大宮とは、富士宮市の式内名神大社旧官幣大社、富士山本宮浅間神社に推定して不安は残らない。

このやうに考えてくると、サカオリの宮は、登山口の富士吉田市辺りにあったとしても、少しもおかしくない。(中略)即ち富士吉田市の大明見こそ格好の地しいふことになってくる。

(文章は前後するが)、山梨県富士吉田市の小室浅間神社に、古代文献マニアの間でつとに有名な「富士古文書」といふものが保存されてゐることを、読者は既にご承知であろう。(中略)その中に今の押野にごく近い富士吉田市大明見といふ処に「坂下の宮(サカオリ)」があると書かれてゐるのである。

（吉田のコメント）
　山梨県富士吉田市上吉田にある北口本宮富士浅間神社のご由緒には、「日本武尊甲斐国酒折宮通過の際、・・（後略）」が見える。

甲府市酒折にあった酒折宮（考察）

　松本先生やＩさんの意見と私の意見を対比する気持ちはありませんが、私は過去からの「地名」の残存状況より、酒折宮は甲府市の酒折宮で間違いないと思っております。そこで「ホツマツタヱ」文献の文をもう一度読みますと、

24-69 文
興津浜　　君喜びて
腰並へ　　行く大宮は
ヤマスミの　道迎えして
三所に　　スワ（氏）が御饗えは

24-70 文
須走りで　　酒折宮に
入り居ます

　そこで興津浜～酒折宮までの、その「酒折宮の所在地」の検証方法であるが、私の検証方法は誰でもわかりやすい方法である。その方法は「原文をそのまま、現在の地図や地形に置き換える方法」である。そのため 24-69～70 文の文章は、「興津浜→三所→酒折宮に入り居ます」に置き換えることができる。その興津浜などの地名を検証すると、興津浜は誰でも知っている通り「旧清水市の興津の浜」で確定と思う。次の大宮は、酒折宮を大宮と読んでいたと解釈される。その大宮の地名は、甲府市内の山梨県西山梨郡の旧村名に「大宮」が見える。

　次の「ミトコロ」について、「Ｉさん」の意見では「御所」となっている。その御所の地名について検証すると、山梨県の東八代郡八代町の旧村名に「御所」が見える。方角的には、甲府市の南側の隣市になる。また現在でも山梨県の南都留郡山中湖村山中御所がある。ここは河口湖～山中湖に向かう国道 138 号線と山中湖周回道路との交差点付近になる。すると「ミトコロ」は、「追分」の反語とも解釈され、「ミトコロ」を漢語で表すと「三所」ではないだろうか。

　次ぎに「スワ」であるが、スワを「氏名」とするか、「地名」とするかである。一般的に地名の「スワ」は長野県に諏訪があるが、山梨県東山梨郡の旧村名に「諏訪」が見える。だが「スワが」となっているため、氏名と解釈したい。

　次に「須走りて」を地名と見るか、動詞とみるかであるが、「Ｉさん」の意見を取り入れて「動詞」としたため、「須走りて」を静岡県駿東郡の旧村名、現・小山町の「須走」と解釈しない。
　次に酒折宮であるが検証するまでもなく、甲府市に酒折や酒折町がある。

（参考）であるが、
　富士山本宮浅間神社のある富士宮市には大宮町はあるが、他の「御所」「三所」「ミトコロ」や「酒折」は見つからない。但し「佐折」は富士宮市に存在する。

ウスヰの坂

前号の「検証ホツマツタヱ28号」で「ウスヰの坂は、神奈川県の箱根山や足柄山などに「ある坂」と特定できる。このことから残念ながらウスヰの坂は、現在の碓氷峠ではないことになる。」と書いたが、その「ウスヰの坂」について先輩の調査を検証していたところ、既に松本喜之助先生は、「月刊ほつま」73・74号(昭和55年3月1日発行)の3～4頁に、「ウスヰの坂のこと」を発表されていた。ウスヰの坂のこと、東京に帰って数日後、石沢氏(現・伊豆の国市)から次のやうないい手紙をいただいた。

「(前略)碓氷峠といふのは、宮城野の諏訪神社の横(仙石原寄り)の所で、地学上から云っても新規外輪山にあたるらしく、小涌園の前にある浅間の鷹の巣山と一緒ですから、道としては古くから拓かれてゐても不思議はないと思います。上古の碓氷道は、ホツマから推すと、三島大社-裾野(市)-箱根外輪山(三国峠-ヤマトタケノ命の泉の伝説のある所か、湖尻峠)を通ったかと思ひます。御殿場-長尾は勾配が急だし、風が強い。湖尻(スカイライン)-桃源台-九頭竜神社-駒岳・神山の稜線を通り、早雲山-強羅-木賀(宮城野)-碓氷峠-仙石原(諏訪神社・金時神社)-矢倉岳-松田で戦斗体制。

行軍とすれば、三島から登って一日で矢倉岳行けるでせうし、峠にたった時が夕暮れとすれば、小野の方が赤々とみえたでせうし、それから夜中に大山と大磯に軍を廻すこともできたでせう。これは一日の行程だと思います。暇をみて実際に歩いてみたいです。タケノ命の帰路は、酒折宮から出て、やはり激しかった戦斗とその行動を共にした愛妻(オトタチバナ姫)をおもふ時、やはり箱根に立ち寄らざるを得なかったと思います。それが足柄(乙女峠?)-碓氷-明神(ここで相模湾・房総半島一望、そして有名な「あづまはや」のお歌をよまれたのでせう)-小田原久野・諏訪の原あたりへ下山、といふことになるのではないかと思ひます。碓氷峠は土地の人の話をききますと、昔の通り道-仙石原-宮城野であったさうです。・・・・・(中略)・・・・

最後に碓氷峠の碑ですが、この碑文は大正六年に底倉高山園主沢田和義が書いたものです。この人は現存の「つたや」といふ旅館の主人で、箱根の名所旧蹟が埋もれないやうに努力した方ださうです。」云うまでも、(この様に)ホツマでは(ヤマト)タケノ命が越えられたのはウスヰの坂(39アヤ46)、即ち今日の箱根の碓氷峠であると思はれるのに、日本書紀はこれを「碓日坂」とし、今の群馬県の碓氷峠にもってゆき、古事記は「足柄の坂下」などといつもながらに改竄してしまった。

(おわり)